

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号について（送付）

種子島のハウス栽培マンゴー - において、「ナンヨウキクイムシ」(*Euwallacea fornicatus*) の発生が認められ、特殊報第2号を公表したので送付します。

なお、病害虫防除所ホームページ (www.jpnn.ne.jp/kagoshima) にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第2号

平成19年3月9日
鹿児島県病害虫防除所

- 1 病害虫名 ナンヨウキクイムシ *Euwallacea fornicatus*
(SCOLYTIDAE キクイムシ科)
- 2 作物名 ハウス栽培 マンゴー (品種アーウィン, 加温栽培)

3 発生確認および発生状況

発生確認年月日 平成18年8月11日(種子島農業改良普及センタ - より持ち込み)
同定確認 平成19年1月15日(独法)森林総合研究所九州支所 後藤秀章 氏
発生状況 熊毛郡中種子町(ハウス3地点, 樹齢7~8年生)

中種子町のハウスマンゴーで、6月下旬から肥大期の果実が萎凋し、主枝、亜主枝単位で枝が衰弱する被害が発生した。これらの枝では分岐部の組織が壊死しており、一部にマンゴーかきよう病の感染が認められた。樹皮には直径1mm程度の穿入孔が多数確認され、木質部内にナンヨウキクイムシの幼虫、蛹、成虫が確認された(図1)。中種子町のハウスマンゴー5地点のうち3地点で、約半数の樹が主枝の分岐部を食害され、加害部から先の緑枝や果実が萎凋したため、被害を受けた主枝を切除し寄生部位を削り取った(図2)。

4 形態及び生態の特徴

形態: 雌成虫の体長は2.5mm内外。体色は光沢のある黒色で、口器、触角、脚は赤褐色、表面はまばらな黄色の毛に覆われる。前胸背板の前方3分の2は同心円状の鱗片状突起をそなえ、その後方は弱く点刻される。上翅の長さは幅の約1.2倍、点列部は浅く大きな点刻からなり、点列部には1列の細かな点刻列があり、それぞれの点刻は刺毛をそなえる。斜面部は隆起せず、側縁は縁取られる(図3, 4)。

生態: 本種は通常倒木・衰弱木などで繁殖し、健全木には穿孔しない。成虫は木部に孔道を形成、その内壁に餌となるアンブロシア菌を接種し、繁殖した菌のみを成虫・幼虫ともに食餌する。幼虫は成虫の穿った孔道内のみで成育し、木部を食害しない。マンゴーに対する加害では、成虫が枯れ枝などの衰弱した部分から孔道を形成し、孔道の形成やアンブロシア菌を含む随伴菌類により、木部が腐朽し樹勢が衰えると考えられる。孔道は木部に形成され、穿入口から切断すると同心円状となり、孔道に沿って白い菌糸が叢生する(図5)。南アジア地域や台湾では茶の害虫として報告されており、1990年以降にアメリカのフロリダ地域で花木類(*Delonix regia*)への加害が確認されている。日本国内では1973年に小笠原諸島父島で、2000年に徳之島でマンゴーへの加害が報告されている。

5 防除対策

本虫の移動・分散および生態についての報告は少なく、登録農薬がないため、以下の耕種的防除に努める。

(枯れ枝の発生防止)

1. せん定時に結果枝を切り返す場合は、枝の枯れ込みを抑えるためにハサミはこまめに研いでヤニを落とす。切断面を滑らかに保ち、切口には保護剤を塗布してゆ合を促す。
2. 着果過多や台風被害により樹勢が衰弱すると本虫の加害を受けやすくなるので、樹勢維持に努める。

(寄生枝の処理)

1. 本虫は枯れ枝部から侵入し木質部を伝って孔道を造るので、侵入部位まで枝を切除し、加害された木質部は削り取り、保護剤を塗布してゆ合を促す(図6)。
2. せん定後は速やかにせん定枝を園外に持ち出し処分する

6 引用文献:九州病害虫研究会報告 第52巻(2006)山口ら

後藤秀章 氏(私信, 2007), 「新応用昆虫学」(朝倉書店): 209~214

Division of Plant Industry www.doacs.state.fl.us/pi/enpp/ento/twonewxyleborines



図1 孔道内部の幼虫および蛹



図2 被害により主枝を切断した樹

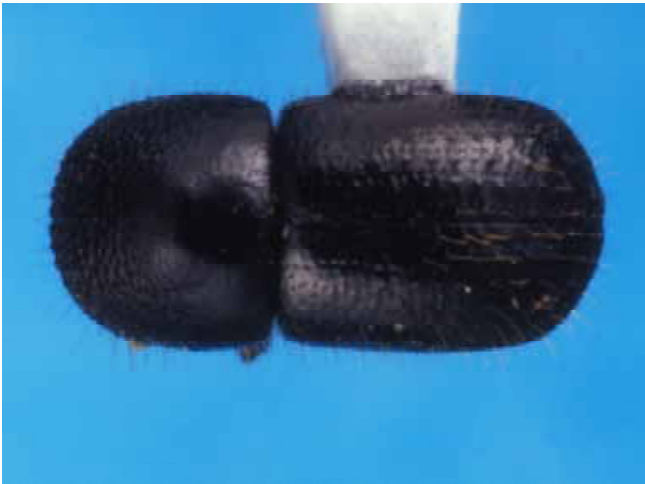


図3 成虫上面（体長2.5mm：後藤氏原図）



図4 成虫側面（後藤氏原図）

白色のアンプロシヤ菌糸



図5 同心円状の孔道



図6 被害部の削り取りとゆ合剤の塗布による被害軽減